

『稲むらの火』と広村堤防

津波から村民を救い、復興に導いた濱口梧陵

多大な被害が予想され、防災準備が進む南海トラフ巨大地震。約170年前にも、これに関連する安政南海地震が起こり、和歌山県広川町には、高さ約5mの大津波が押し寄せた。

醤油醸造業を営む濱口梧陵は、稲むら（脱穀後の稲わら）に火を放ち、村人を高台へと導いた。文筆家・小泉八雲が作品化した他、国語教材にもなった逸話であり、この逸話にちなみ、安政南海地震が発生した11月5日が国連「世界津波の日」に制定された。

津波後の堤防建設をはじめ、梧陵の活躍は広範囲にわたる。

「稲むらの火の館」の雑賀 聴館長に話をうかがい、梧陵の生涯を駆け足で追った。



はまぐち りょう
濱口 梧陵
(1820～1885年)

実業家・社会事業家・政治家

監修・資料提供：稲むらの火の館 広川町教育委員会



「安政聞録」より
(養源寺蔵)

広村を襲う安政南海地震津波(1854年)。人々が避難する様子を被災者の一人が描いた。写真提供：広川町

現在の広村堤防

「築堤の工を起こして住民百世の安堵を図る」

安政南海地震・津波と
奇跡の復興事業

濱口梧陵は、1820年（文政3年）、広村（現・広川町）の濱口家分家に生まれた。本家の初代・儀兵衛は関東の銚子でヤマサ醤油を起こし、梧陵は跡継ぎとして12歳のとき丁稚奉公を始めた。働きながら文武両道の教育を受け、34歳で第七代当主・儀兵衛を名乗る。

そして、広村に帰郷していた35歳の冬、安政南海地震が起こった(14P下「実録」参照)。被災により人命が失われ、多くの家財・田畑・漁船等が損失・損傷した。梧陵は備蓄米を集めて寄付し、農具や漁船を無償で援助、商人には資本を貸与して自立を促した。さらに、仮設住宅50軒を建築し、土木工事にも着手する。

橋梁の再建のほか、梧陵が心血を注いだのが広村堤防の

築堤。被災者等のべ5万7千人近くを雇用し、私財・銀94貫余り（約5億円）、工期4年弱（農繁期除く）を費やして、高さ5m・根幅20m・延長600mの堤防を完成させた。

「築堤の工を起して住民百世の安堵（将来に至る住民の安心・安全）を図る」という梧陵の言葉通り、被災者自ら築堤を通して復興への希望を育み、村民の離散を防いだ。今も「奇跡の復興」とされている。

時が流れて1946年（昭和21年）、昭和南海地震の際にも、広村堤防は市街地への津波の流入を防ぎ、人々の命と財産を守った。

家業・政治・医学など
多様な分野で社会貢献

梧陵は生涯を通して多分野の人材と交流し、さまざまなフィールドで活躍した。津波の後、支援していた勝海舟から咸

臨丸での欧米視察を勧められるが、村の復興や残務整理に追われて断念した。師友と仰いだ蘭医学者・三宅良斎は、江戸で西洋医学所を設立し、これが東京大学医学部の礎となった。49歳で知り合った福沢諭吉とは、終生にわたり交流を続けた。明治4年（1871年）には、大久保利通から駅通頭（郵政大臣）就任の命を受ける。そして60歳のとき、和歌山県議会の初代議長に就任した。

すべての職を退いた65歳の頃、念願の欧米視察を実現する。しかしその途上、ニューヨークで体調を崩して客死した。諭吉など多くの著名人が哀惜し、海舟は村内の廣八幡宮の記念碑に梧陵の生涯を記して偉業を称えた。村の葬儀には約4千人が集まり弔意を示した。今も広川町では、幼児から高齢者まで、敬慕の念を込めて彼を「梧陵さん」と呼び親しんでいる。

※設立時はお玉ヶ池種痘所。種痘所が火災に遭い、梧陵が再建資金を支援した。

「経世済民」の精神で歩んだ梧陵

梧陵は分家に生まれ、跡取りとなりますが、丁稚として入職し従業員や濱口家の人々と苦楽を共にしてきました。濱口家で受け継がれてきた「経世済民」の精神が根底にあって、人々を平等に敬い、救済する人生を歩んだのだと思います。小泉八雲が描いた「生ける神(A Living God)」は事実とギャップがありますが、「命を救う」というテーマをしっかりと伝える、優秀な物語だと思ひます。

「稲むらの火の館」館長 雑賀 聴氏



5 明日を担う若者に教育を 耐久社・濱口梧陵像

耐久社は、江戸末期に梧陵が知人たちと創設した剣術・学問の教育施設。現在耐久中学校の敷地内に保存されており、グラウンドの向こう側には梧陵の銅像が立っている。



学びを永く続けるよう
「耐久社」と命名



戦時中に供出され、
地元の人などが再建した銅像

6 山の麓に静かに立つ墓石 濱口梧陵墓

市街地の南西、淡濃山の山麓に佇む梧陵の墓。側面に「明治十八年四月廿一日 八代儀兵衛建」と刻まれている。



梧陵の墓石と説明板

4 梧陵の親戚が敷地の一部を開放 東濱口公園

初代・濱口吉右衛門を祖とし、醤油問屋「廣屋」(後のヒゲタ醤油)を営んだ、通称・東濱口家。その邸宅の敷地一画が公園となっている。当家は安政大津波の後、西濱口家の梧陵と共に村の復興に尽力した。



濱口家住宅(東濱口家)
隣接して公園がある



広川町散策MAP

※市街から廣八幡宮へ至る大道は、「安政聞録」(11P)にも描かれた、主な津波避難経路

●濱口梧陵碑
●廣八幡宮

実録「稲むらの火」～避難民の灯台となる～

安政元年11月4日(1854年12月23日)、広村で地震が起こり(東海地震)、村人は高台の廣八幡宮へ避難した。潮位変化は少なく各々帰宅するが、翌5日に地震が再来(南海地震)。夕闇迫るなか津波が襲い、濱口梧陵は波に飲まれつつ廣八幡宮へたどりついて、漂流者らの目印となるよう稲むらに火をつけた。前日の避難経験と、稲むらの火によって多くの村人の命が救われた。

地震・津波の犠牲者を悼み、防災意識を引き継ぐため、広村堤防前で毎年11月5日に「津浪祭」が行われている。



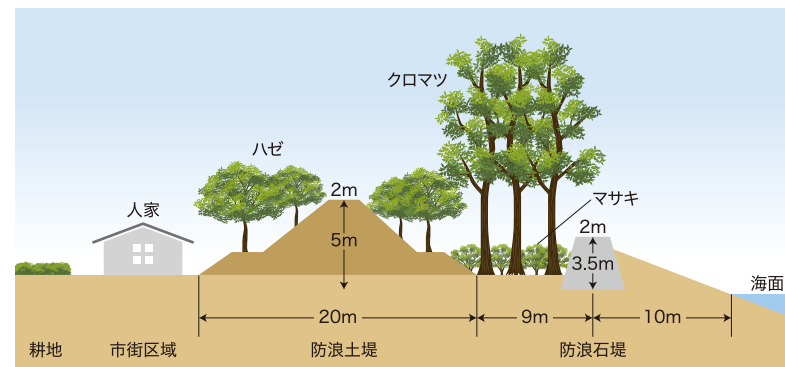
写真提供: 広川町

濱口梧陵の思いを、今も灯す広川町へ

広川町には「稲むらの火」ゆかりのスポットが点在する。文化庁は、町の防災文化にまつわるストーリー「百世の安堵」を日本遺産として認定。その構成要素をいくつか訪ねてみよう。

1 梧陵の多様な工夫が生きる 広村堤防

広村には、畠山氏の築いた中世の防浪石堤があったが、安政元年の津波はこれを越えて浸入した。梧陵が、親戚・濱口吉右衛門と共に私財を投じて造った広村堤防は、現在、国の史跡に指定されている。



当時の広村堤防。



現在の広村堤防。

＜広村堤防の横断面図＞

土堤に植えたハゼはロウソクの原料になり村の収入源となった。マサキは根を張って土堤を守り、クロマツは防風・防潮の役割を果たした。クロマツは山で生育している方角に合わせて移植したため、枯れずに根付いたという。また堤防は、年貢の高い上田のあった場所に設け、津波後の節税対策とした。堤防盛土の下には、地震・津波被害による廃材やガレキが埋められている。



2 濱口梧陵記念館&津波防災教育センター 稲むらの火の館

濱口梧陵の西濱口家邸を活用した「濱口梧陵記念館」と、実践的に地震・津波防災を学べる「津波防災教育センター」で構成。梧陵の生き方や人柄を学び、3D映像などで津波の恐ろしさを体験しよう。

津波防災教育センターの展示



3 役場前の広場で物語を再現 「稲むらの火」広場

広川町役場前に、梧陵が「稲むらの火」を掲げる銅像が立つ。迫力と臨場感があり、逸話の1シーンを実写化したよう。付近に、この物語を載せた小学国語読本の碑もある。

稲むらの火を掲げる銅像

